

氏名(本籍)	おか だ かず こ 岡 田 和 子 (埼玉県)
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	博 乙 第 2191 号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	江戸および明治期の洋語学における文法用語の比較研究 —和蘭語・英語・独逸語をめぐって—

主査	筑波大学教授	博士(文学)	荒木正純
副査	筑波大学教授		名波弘彰
副査	筑波大学助教授		矢澤真人
副査	筑波大学講師	博士(文学)	白山利信

## 論文の内容の要旨

本論文は、江戸期および明治期の洋語学習における文法用語の成立とその変遷過程を文献学的に調査し、その結果を年代的に対照表にあらわし、それをもって日本の語学の術語翻訳の特徴と問題点を明らかにしようとしたものである。本論文の構成は以下のとおり。

### 序章 文法用語研究の目的と問題点

#### 第一章 《原形》と《不定法》

序節 何故英語の《原形》はドイツ語では《不定法》なのか

第一節 和蘭語における de onbepaalde wijs

第二節 英語学における Root と Inf.

第三節 独逸語における Infinitiv と 〈Grundform〉

#### 第二章 《過去》と《半過去》

序節 蘭語学の《過去》と《半過去》に関する疑問

第一節 蘭語学における《過去ノ現在》

第二節 英語と独逸語における訳語の特徴

第三節 蘭・英における Perf. と Imperf. の用法の逆転－問題点①の考察

第四節 英・独における Perf. と Imperf. の用法の逆転－問題点②③の考察

#### 第三章 《分註法》と《疑問法》－《仮定法》以前の Conj./Subj.－

序節 蘭・英・独語学における Conj./Subj. の問題点

第一節 蘭語学における《分註法》と《疑問法》

第二節 英語学における《仮定法》と《接続法》

第三節 独語学における《接続法》と《約束法》

第四節 まとめ

## 終章

附録 『和蘭語法解』はオランダ語の文法書か

### APPENDIX

文法書及び参考文献

現代からみて、江戸期の蘭語学と明治期の英語学と独語学の理解に「誤解」と思われるものがある。たとえば、動詞の「原形」や「現在完了」、「仮定法」を、江戸・明治期の洋語学者は理解できなかったとされる場合がその一例である。しかしそれは、彼ら研究者の語学力不足による錯誤であったのだろうか問い、序章は、これに答えることが本論文の中心的な課題となっていることをのべている。

本論文はこの問いに対し、膨大な調査資料をもとに、そうではないことを論証し、誤りと思われることは、当時の学者たちの語学力不足の誤解ではないとしている。現代からみて「誤解」のように思えるのは、第一の原因に、江戸期・明治前期の文法が、現代文法と質的に異なっていたことによるという。欧州では、1830年代頃から歴史的比較的语言研究（新文法）が盛んになり、従来の伝統文法（旧文法）との間に内容的変化が生じた。江戸期・明治前期の文法は旧文法であり、そのためとりわけ話法と時制にかんして、現代文法との間に解釈の食い違いがでてきたという。第二の原因は、蘭語・独語と英語とでは、時制と話法の用法が異なっていたこと、さらに第三の原因は、江戸期と明治期の洋語関係者の間に、日本語に関する知識の差があったこと、この三つの原因があったとし、この間の経過を第一章、第二章、第三章で具体的に検証している。

第一章では、このような新旧文法間の差異の例として、動詞の基本形を表わす《原形》と《不定法》という用語を取りあげ、江戸期の蘭語学者は、動詞変化の基本形をしばしば《現在形》と呼ぶが、それは、《原形》の理解がなかったからではなく、《原形》に相当する和蘭語そのものが、同時代の蘭文典原書に存在していなかったからであると指摘している。

第二章では、《過去》と《半過去》があつかわれている。現代の文法観からすると、江戸期の和蘭語と明治20年代頃までの英・独語が、単独の過去形を《過去ノ現在》《過了現在》《半過去》、和蘭語の <hebben+p.p>、英語の <have+p.p.>、独逸語の <haben+p.p.> を単に《過去》と呼んでいることは奇異に映る。現在完了である後者こそ、《過去ノ現在》《過了現在》《半過去》のように思われる。従来の研究はこの点をもって、当時の学者たちが現在完了形の理解を誤ったと考えてきた。しかし、著者は、17世紀以降の蘭・英・独文法書にある時制を可能な限り網羅的に調査し、過去形と現在完了形の用法が、蘭・独語と英語の間では逆になっていると指摘している。

第三章では、《分註法》と《疑問法》があつかわれている。これらは「仮定法」を表わす蘭語学の用語であるが、これに対応する原語の和蘭語がなく、江戸期の蘭語学者が考え出した意識の術語であり、著者は「創出術語」という用語で説明している。こうした意識の術語の多さが、蘭語学における「仮定法」関連の用語の特徴であると指摘し、名前の由来が不明のこともしばしばみうけられるという。たとえば、《死語法》という用語は、国学と漢学の知識なしには理解不可能なものであり、《分註法》もまた、国学と漢学の〈分註〉という注釈様式を参考にしたと考えられると指摘している。《疑問法》は、「疑問文を作る法」と誤解され、幕末の蘭語学者による「仮定法」の誤訳であるとされることがある。しかし、これは「不確かな仮定推量を表わす」という定義内容の意識であって、和蘭語研究者の誤訳ではないとする。旧文法の「話法」(Modus)は Infinitivus をそれと認め、また、当時の文典には「話法」とは別の、肯定・否定・疑問・否定疑問という「法」の存在があるなど、かなり現代と異なる点が見出される。しかし、こと「仮定法」に関して問題なのは、江戸期と明治期の間に見られる非現実仮定の和訳の差であるとし、国学と漢学の知識を豊かに持った江戸期の蘭語学者が達意の文語訳をするのに対し、類型化した「直訳法」に凝り固まり、文語か口語の訳解を持たない明治期の訳文は、日本語として意味をなさないことが多いと文化論的指摘もしている。

終章では、第一章、第二章、第三章で析出された追究成果のまとめをして、江戸期および明治期の日本洋語学の素晴らしさを称賛し、当時の学問のレベルは高く、理解は極めて正確であるという。むしろ、その正確な理解故に、明治期の文法用語の混乱が誤解の結果として片付けられることがおこったという。実際、その混乱は、同時代に欧州に起こった新・旧文法の葛藤を正確に反映していたと結論づけている。用語の分裂逆転現象などは、語学教育的にみればマイナスではあるが、文化論的には評価することができるという。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文の最大の特徴は、愚直と思われるほど渉猟収集した資料の驚愕的な量である。しかも、それを理解・整理し、表にあらわすことによって、一目瞭然とはいかなくとも、きわめて明確な輪郭を呈示できる鳥瞰図的形態をあたえたことは、何にもまして特筆すべき成果である。

論としては、日本に伝来した原語の流れに即して、オランダ語、英語、ドイツ語を扱っているが、とくに論点を動詞の「原形」や「現在完了」、「仮定法」に限定したことが成功のもとになっている。つまり、日本語とゲルマン語系原語との溝のある問題であるからだ。この選択の仕方も、著者のセンスのよさを裏付けている。こうした研究は、ややもすると、網羅的に調査し、分類化や図表化でおわる傾向があるが、本論文は、この成果を文化論的・文明論的な関心に接木し、近代日本の西欧文明受容のあり方の一例を呈示していることに規模の大きさがある。後世の人間が、先人の仕事を理解不足と断定してやや軽蔑的にあつてきたことは、後世の人間の不遜な態度であり、一定の状況におかれた先人たちの学的努力を矮小化してしまうことになり、それはまた自らの立場をも切り崩すことになることである。そうした傾向を正した本論文は、現代の研究者に反省を迫る力をもつ。

とはいえ、本論文に求めたいことがないわけではない。ゲルマン語系原語と日本語の溝に着目する場合、たとえば、「冠詞」の現象があつたりするが、こうしたものと本論文があつた問題とどのような関係があるのか、また、ないのかなどの問いがありうる。しかし、こうした疑問は、決して本論文の価値を損なうものではなく、今後の研究の課題となるべきである。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。